歴史に学ぶ

横浜医療センター附属横浜看護学校
副学校長
松橋　綾子

人が未来を考える時，過去における変遷のありさまや物事の現在に至る来歴に興味を抱く．

歴史を学び始めたのは何時からだろうか？日本史，世界史，古文，漢文，等……興味・関心に関係なく授業としての学びであった．先生の話からその時代に起こったポイントを教科書にマーク，年代を暗記し，そしてテストに臨んだ．テストを終えた直後，その内容は遠くなり，受験であわてて勉強する．そのような学生時代の記憶である．

看護教員となり，看護歴史を教える立場となった．さてどうするか？学生時代の「看護概論」の講義を思い出す．「歴史は考え方を学ぶ学問」という恩師の言葉が浮かんできた．

看護の歴史は，ナイチンゲールに始まり，日本は戊辰戦争に始まるといわれている．看護学校が設立され専門教育がスタートするが，繰り返される戦争により看護教育の発展が難しい時代があり，第二次世界大戦後のGHQの指導により看護教育の新たなスタートとなる．看護歴史のポイントは，第二次世界大戦となる．「戦争後……」と学生に問いかけても戦争を知らない学生達．平成25年度入学生の多くは，平成生れのゆとり教育世代．「戦後」という言葉に「時代の変化」という意味は弱い．それではと考えていくと，身近なところにあった．NHK大河ドラマ「八重の桜」は戊辰戦争の時代である．

私が，「八重の桜」に関心をもったのは，会津戦争の八重と新島襄が何故結婚するのか？　芸能週刊誌のような関心である．同志社大学を創立した新島襄は，わが国２番目の看護教育機関の京都看病婦学校を設立する．しかし，看護教育のテキストには八重の名前は登場しない．八重も看護教育に携わるのか？　このような疑問から，看護歴史を調べることになる．会津若松城での籠城戦では，照姫は「傷をおった者を女達で手当をするよう」と命じ，武家の女性の主な仕事は炊き出しや傷病者の看護であった．城内の診療所に多くの負傷兵が運び込まれ，八重をはじめとした女性達が看護にあけくれる．これが，女性看護の始まりか？　戦の後，八重は兄の覚馬を頼り京都へ．新島襄と出会い，新島襄の同志社女学校設立への力となる．新島襄の病没後は，日本赤十字社に入り，社会福祉活動に従事．八重は日清・日露戦争には，篤志看護婦として傷病者の看護にあたる．会津藩籠城戦で戦場に身を置き，負傷した藩士達を目の当たりにした八重は，自ら従軍看護婦として活躍した．

新島八重が生きた時代は，新しい時代への転換期．東日本大震災の経験は，日本に新たな転換期を迎えている．「どんな困難にも決して諦めず，力強く前に進む～命を守るために」という八重の言葉が聞こえる．看護歴史を理解し，看護師としての未来を考えて欲しいという思いをどう伝えるか？　学生７Ｇが発表した看護歴史は，古代から現代までの看護の神髄を繋げていた．素晴らしき未来のナース達．指導者として，自分が歴史を学び，未来へ繋げる努力をさらに求められている．